

「子育ての楽しみ」要因と少子化対策の可能性

—兵庫県を事例とした探索的分析から—

オチ ユウコ ムラカミ トシキ
越智 祐子*1 村上 寿来*2

目的 少子化対策が行ってきた、様々な育児負担の軽減を目的とした「育児支援」の背景には「子育て＝負担」というとらえ方が存在している。しかし、そもそも子育てを負担としてとらえる価値観が少子化を押し進めているひとつの要因であるとすれば、負担軽減を狙う政策だけでは、少子化傾向に歯止めをかけるには大きな限界があると言わざるを得ない。したがって、そうしたとらえ方を超えた新たな視点を導入した政策展開が必要であると考えられる。それは「子育ての肯定的要素の増幅」という観点である。本稿では「子育ての楽しみ」に焦点をあて、質問紙調査からその構成要素を明らかにすることを試みた。

方法 兵庫県下の市町に対して1歳半健診対象者への調査票配布への協力を依頼し、協力が得られた市町で1歳半健診の対象となった児の母親を対象に、自記式調査票による質問紙調査を実施した。調査票は後日、同封の返信用封筒による個別回収を行った。調査の実施期間は2007年11～12月であり、配布数は2,000票、有効回収数は532票で有効回答率は26.6%であった。

結果 妊娠・出産・子育ての楽しみに関する項目を作成し、因子分析を行ったところ、「子どもへの愛着」「変化への適応性」「自分の成長」「つながりの増加」「コントロール願望（不全）感」「身近なモデルの存在」の6因子が抽出された。「都市」と「地方」で因子得点の平均値を比較したところ、「コントロール願望（不全）感」が「地方」で有意に高いことがわかった。

結論 養育者の主観的な「子育ての楽しみ」を構成する要素を検討し、「子育ての楽しみ」の増幅」という少子化対策の新たな視点を提供した。既存の施策についても、新たな視点から再評価することが可能である。

キーワード 子育ての楽しみ、少子化対策、因子分析

I はじめに

日本では、1990年のいわゆる「1.57ショック」を契機として、少子化傾向が「問題」ととらえられ、その対策に注力することとなった。2004年に閣議決定された「少子化社会対策大綱」では、日本の現状を「生み、育てにくい社会」と表現し、「子どもを生み、育てることに喜びを感じることができる社会」へ転換すべきとしている¹⁾。出産や育児に対する「少子化対

策」のまなざしは一貫して「育児支援」であり、その目的は具体的にいて、経済的・物理的・心理的な様々な育児負担の軽減にあるといつてよい。つまり背景には、「子育て＝負担」というとらえ方が存在している。「少子化社会対策大綱」では具体的に少子化の背景要因が6点ほど挙げられているが、育児の孤立や負担感の大きさ等、多くはこの「子育て＝負担」観に関連するものである。

政策動向と相補的に、育児支援に関する実証

*1（財）ひょうご震災記念21世紀研究機構研究員 *2 同主任研究員

研究も行われてきた。その多くは母子保健において、母親の育児負担（感）の構成要素を明らかにし軽減することを目的とした、調査結果に基づく検討である。たとえば田中²⁾は、母親の育児環境への適応に影響を与える要因について検討した結果、不適応状態にある母親に注目し、母親の適応を高めるにはその苦痛を軽減し、自尊感情を高める支援が必要だと述べている。このような「育児不安」「育児ストレス」「育児負担」等の同定と軽減に関する実証研究は数多く存在する³⁾。

もちろん、出産や育児は多方面にわたる多くの負担をともなうことがらであり、その負担の軽減は重要な課題である。しかし「育児支援」を「負担の軽減」ととらえる方向に力点を置く少子化対策は、結果として、「出産や育児とはつらいもの」という、出産や育児の一面的なとらえかたの追認と流通という、意図せざる効果をも持ってしまうかねない。そもそもそのように子育てを負担としてとらえる価値観が、少子化を押し進めているひとつの要因であるとすれば、そうした負担軽減を狙う政策だけでは、少子化傾向に歯止めをかけるにはやはり大きな限界があると言わざるを得ないだろう。そうした点を意識してか、2006年に少子化社会対策会議決定された「新しい少子化対策について」では、「従来の対策のみでは、少子化の流れを変えることはできなかった」として、「生命を次代に伝え育んでいくことや家族の大切さが理解される」ような「社会全体の意識改革が必要」だとうたっている³⁾。

そうした意識改革をすすめる上でも、「育児＝負担」というとらえ方を超えた新たな視点を導入した政策展開が必要ではないか。それは「育児の肯定的要素の増幅」という観点である。確かに育児には様々な負担といった否定的要素があるにせよ、他方で育児は肯定的要素をも持つはずである。具体的には子育てについて「社会的価値」「個人の主観的価値評価」が考えられる。

たとえば「子育ての社会的価値」には、持続可能な社会の形成や、多様な他者との共生社会

を実現すること等が挙げられよう。また、養育者個人の「主観的価値評価」としては、子育てそのものから得られる「喜び」や「楽しみ」といった要素が考えられる。こうしたいわば「子育ての主観的な楽しみ」という観点に関しては、「子育ての負担（感）」に関する研究に比べて数は少ないものの、実証研究が取り組まれてきた。そのひとつに、こども未来財団⁴⁾がある。そこでは意識調査の結果から、子育ては「楽しいもの」、および子どもを持つことは親の成長につながるものであるとの指摘がなされている。同様に、古橋は育児の困難性への注目の高さに比べて、育児の「喜びや楽しさは希薄になっている」と指摘した上で、意識調査から、子どもを育てる喜びのなかに、子どもの存在そのものを肯定することや、子どもの成長に伴う喜びがあることを明らかにした⁵⁾。今後の少子化対策においては、こうした肯定的な側面をより具体的に検討し、積極的に評価・促進することが求められよう。

たとえば、居住地域によって、家族形態や就労状況は異なると考えられるが、このことと「子育ての楽しみ」のありようとは、関連するのではないか。あるいは、地域における子育てサークル等はこれまで、主として母親の育児ストレスや負担感の軽減策としてとらえられ、その成果を評価されてきた。少し視点を変えて、「子育ての楽しみ」との関連について検討することが必要ではないだろうか。

以上のような問題意識を背景にしつつ、本稿では、「子育ての楽しみ」の構成要素について、兵庫県を題材に質問紙調査の結果から考察する。

Ⅱ 方 法

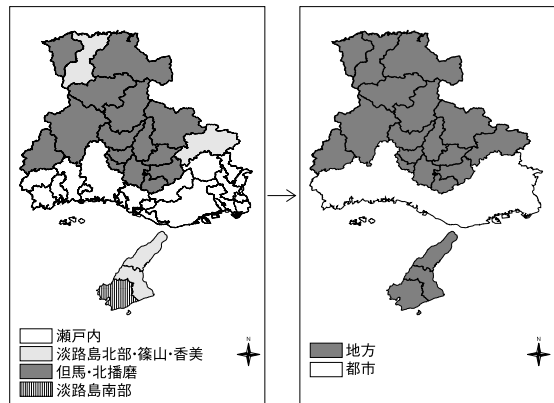
(1) 調査概要

妊娠体験や出産体験がまだそれほど過去のことになっておらず、乳児の子育てが一段落したと考えられる時期の女性の子育て意識を定量的に把握するために、質問紙調査を行った。具体的には、兵庫県下の市町に対して1歳半健診対象者への調査票配布への協力を依頼し、協力が

表1 配布と回収

クラスタ名	配布数	有効回収数	回収率 (%)
総数	2 000	532	26.6
瀬戸内(神戸市・尼崎市など)	1 713	430	25.1
淡路島北部・篠山・香美	61	41	67.2
内陸部(豊岡市・丹波市など)	199	53	26.6
淡路島南部	27	7	25.9
不明		1	

図1 地域区分



得られた市町で自記式による質問紙調査を実施した。調査票は後日、個別郵送回収を行った。主な調査内容は、妊娠・出産・育児体験についての意識、とくに楽しさについて、子育てサークル等への参加の有無、子育てに関する相談先や情報源に関する項目、妊娠・出産の計画性について等である。調査の実施期間は2007年11～12月であり、配布数は2,000票、有効回収数は532票で回答率は26.6%であった。

(2) 対象

具体的な対象者の選定手順は、次のとおりである。まず、調査期間については、2007年11月～12月の1カ月間とし、この間に1歳半健診を受診する児の母親を調査対象者とした。兵庫県全体で、1年間の出生数はおよそ48,000人程度なので、1カ月の調査期間の出生数は、およそ4,000人程度となる。その母親をほぼ同数と見なすと、具体的な調査対象者数は4,000人程度となる。

次に、調査地点の選定を行った。まず、兵庫県の市町を、女性の働きかたというライフスタイルから4つのクラスタにわけ^{注2)}、クラスタごとに出生数の多い市町から順に、母子保健担当者へ調査協力を依頼した。協力が得られた市町の1歳半健診の受付会場にて、対象者に調査票を手渡し、後日、返信用封筒を利用して回答者個人から調査票を郵送回収した。配布と回収に関する詳細は、表1に示すとおりである。

(3) 手続き

以下の手順にしたがって、統計解析ソフトSPSS 15.0J for Windows上で分析を行った。

表2 回答者の基本的な属性 (n=532)

	人数	%
年齢		
25歳未満	18	3.4
25歳以上30歳未満	113	21.2
30歳以上35歳未満	259	48.7
35歳以上40歳未満	116	21.8
40歳以上	25	4.7
無回答	1	0.2
最終学歴		
中学校	6	1.1
高校	132	24.8
短大、もしくは専門学校	245	46.1
大学	136	25.6
大学院	12	2.3
その他	1	0.2
現職		
経営者、役員	6	1.1
常時雇用されている一般従業者	72	13.5
臨時雇用・パート・アルバイト	50	9.4
自営業主、自由業者	15	2.8
家族従業者	12	2.3
内職	3	0.6
専業主婦	361	67.9
その他	13	2.4
世帯構造		
核家族	474	89.1
拡大家族(三世代以上同居)	52	9.8
その他	5	0.9
無回答	1	0.2
子ども数		
1人	266	50.0
2人	191	35.9
3人	63	11.8
4人	5	0.9
5人	1	0.2
無回答	6	1.1
居住年数		
1年以下	71	13.3
1～3年以下	198	37.2
3～5年以下	122	22.9
6～10年以下	113	21.2
11年以上	14	2.6
無回答	14	2.6

まず、①兵庫県下の「まちの子育てひろば」参加者に対して、「妊娠・出産・育児についての主観」に関するグループインタビュー調査を複数個所で実施した。②インタビュー調査結果および、養育者の否定的育児観や肯定的育児観に関する先行研究をふまえ、「子育ての楽しみ」の構成要素について仮説を立てた。次に、③仮説に基づいて「妊娠・出産・育児の楽しみ」に関する34項目を作成し、質問紙調査を実施した。④34項目の回答結果を用いて因子分析を行った。⑤調査地点である4つのクラスタを、地理的な連続性や特性から2つに大別し「都市」「地方」の2地域区分とした(図1)。最後に、⑥抽出された因子について因子得点を算出し、「都市」「地方」間で、平均値に差があるかどうかについて、t検定により確認した。

III 結 果

(1) 回答者の基本属性

回答者の主な基本属性は、表2に示すとおりである。回答者の年代は、30歳以上35歳未満が最も多く半数近くを占めた。最終学歴(中退を含む)は、短期大学・専門学校が最も多く、46.1%であった。現在の職業(以下現職)は、専業主婦が最も多く、7割弱を占める。常時雇用されている一般従業者は13.5%だった。なお、

表3 地域区分

クラスタ名	人数	地域区分	人数	%
総数	532	総数	532	100.0
瀬戸内	430	都市	430	80.8
淡路島北部・篠山・香美	41	地方	101	19.0
内陸部	53			
淡路島南部	7			
不明	1	不明	1	0.2

表4 居住地域区分と三世代同居

(単位 人, () 内%)

	総数	三世代家族かどうか	
		核家族・その他	三世代以上家族
総数	530	478 (90.2)	52 (9.8)
都市	429	402 (93.7)	27 (6.3)
地方	101	76 (75.2)	25 (24.8)

注 $\chi^2(1)=31.2$, $p<0.01$

妊娠前の職業(以下、前職)と現職との職業移動については、妊娠を機に、およそ半数の人が退職を経験している。

回答者の属する世帯構造は、核家族が全体のおよそ9割とほとんどを占める。子ども数は、1人が266人で最も多かった。居住年数は平均4年程度であり、9割以上の方は10年以下の居住年数であった。

居住地域区分については、表3のとおりである。居住地域によって、「地方」に区分される地域では、三世代同居の割合が多く($\chi^2(1)=31.2$, $p<0.01$)、配偶者の親と近くに住んでいる($\chi^2(1)=5.64$, $p<0.05$)ことが確認された(表4, 5)。

(2) 「子育ての楽しみ」の構成要素

34項目について、主成分法・バリマックス回転により因子分析を行った。スクリー基準により因子数を6と決定し、十分な因子負荷量を示さなかった「子どもの名前をあれこれ考えるのは楽しい」「子育てについて知らないことが多いけれども何とかなるものだ」「子どもは仲間同士の遊びを通じて成長する」の3項目を除外した最終分析結果を表6に示す。第1因子は、子どもがかわいい、いとおしいといった、子どもそのものへの思いである「子どもへの愛着」因子である。第2因子は、妊娠した自分や環境の変化に対して「調べるのは楽しい」「計画を立てるのは楽しい」といった項目を含む「変化への適応性」因子である。これは、養育者の心身状態や周辺状況が変化することを、前向きにとらえていることを示す因子である。第3因子は、養育者自身についての、「今までの自分とは違う」「誇らしい」といった「自分の成長」因子

表5 居住地域区分と配偶者の親の住まいとの距離

(単位 人, () 内%)

	総数	配偶者の親の住まいとの距離	
		徒歩10分未満	徒歩10分以上
総数	503	83 (16.5)	420 (83.5)
都市	405	59 (14.6)	346 (85.4)
地方	98	24 (24.5)	74 (75.5)

注 $\chi^2(1)=5.64$, $p<0.05$

表6 「子育ての楽しみ」に関する因子分析（主因子法・バリマックス回転）結果

	回転後の因子負荷量						共通性
	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6	
因子1：子どもへの愛着 子どもをみていると飽きない 子どもをあやすことは楽しい この子さえいなければと考えることがある お腹の中で赤ちゃんが動くと、いとおしい 子どもがそばにいないと正直ほっとする 赤ちゃんをみていると、ついはおずりをしたくなる お腹が大きくなるにつれ、赤ちゃんへの愛情がわく 子育てには、日々新たな発見がある 成長した子どもを想像すると楽しい	0.687 0.664 -0.582 0.574 -0.572 0.563 0.551 0.492 0.480	0.069 0.129 -0.061 0.426 0.000 0.177 0.434 0.035 0.154	0.078 0.081 0.013 0.047 0.036 0.105 0.087 0.280 0.201	0.245 0.196 0.060 0.072 0.038 0.111 0.055 0.117 0.231	-0.155 -0.100 0.347 0.125 0.193 0.192 0.167 -0.117 0.016	0.121 0.109 -0.163 -0.113 -0.158 -0.091 -0.086 0.131 0.136	0.582 0.524 0.493 0.547 0.392 0.417 0.538 0.366 0.366
因子2：変化への適応性 どこで出産しようか、人に聞いたり調べたりするのは楽しい どの出産方法を選ぶか、人に聞いたり調べたりするのは楽しい いつ子どもをつくろうか、計画を立てるのは楽しい 妊娠期間中、自分なりに生活を工夫するのは楽しい 妊娠中の生活は、先の予測のつかないところが楽しい	0.095 0.061 0.159 0.181 0.133	0.793 0.754 0.643 0.639 0.464	0.075 0.099 0.054 0.123 0.208	0.173 0.143 0.084 0.166 0.294	0.024 0.039 0.033 -0.242 -0.178	0.094 0.108 0.292 0.047 0.072	0.683 0.615 0.536 0.545 0.400
因子3：自分の成長 出産を経験した自分は、それまでの自分とはまるで違う 母親になった自分は、それまでの自分とはまるで違う 出産を乗り越えた自分を、誇らしく思う 子どもを育てることで、新しい自分自身を発見できた 子育てをがんばっている自分を、ほめてあげたい	0.073 -0.053 0.182 0.227 0.074	0.036 0.013 0.216 0.144 0.092	0.860 0.854 0.708 0.666 0.561	0.087 0.132 0.100 0.207 0.053	0.009 -0.023 0.124 -0.100 0.326	-0.008 -0.038 0.098 0.042 0.135	0.754 0.752 0.616 0.570 0.456
因子4：つながりの増加 子育てには、自分の友人が増える楽しみがある 赤ちゃんをきっかけにして、知り合いができてうれしい 子どもを連れていくと、知らない人からでも話しかけられてうれしい 健診等には、友人知人をつくる楽しみがある 妊娠中は、知らない人からでも話しかけられてうれしい	0.135 0.271 0.116 -0.025 0.184	0.074 0.049 0.237 0.172 0.433	0.161 0.085 0.196 0.047 0.096	0.752 0.729 0.670 0.631 0.518	0.011 0.141 -0.086 0.006 -0.025	0.064 -0.054 0.039 0.160 -0.041	0.619 0.638 0.566 0.457 0.500
因子5：コントロール願望（不全） 子育ては、思ったとおりにはいかず、つらい 子どもがいることで、自分の世界は狭くなったと感じる 妊娠中は、制限ばかりでうんざりする 妊娠中の生活は、自分の思いどおりにしたい 子育ての目標（おむつはずしの時期など）が思いどおだと、達成感を感じる	-0.358 -0.259 -0.186 0.049 0.125	0.017 -0.045 -0.390 -0.075 0.151	0.099 -0.064 0.097 -0.024 0.106	-0.062 -0.145 0.043 0.067 0.041	0.625 0.622 0.540 0.523 0.517	-0.067 -0.158 -0.033 0.029 0.118	0.538 0.506 0.491 0.287 0.333
因子6：身近なモデルの存在 よその赤ちゃんをみると、自分ももうひとりほしくなる 子だくさんの人が身近にいと、自分ももうひとり育ててみようかと思える	0.159 0.173	0.185 0.178	0.058 0.098	0.061 0.124	0.022 -0.039	0.867 0.863	0.818 0.833
初期の固有値 回転後の累積寄与率（％）	7.205 11.71	2.910 22.34	1.975 32.31	1.631 41.05	1.590 47.99	1.429 54.00	

である。第4因子は、「友人が増える楽しみ」「知らない人からでも話しかけられる」といった、他者との関係に関する項目を含む「つながりの増加」についての因子である。第5因子は、「思ったとおりにはいかない」一方で「思い通りにしたい」という、「コントロール願望（不全）感」因子と解釈できる。これは、コントロールしたいと感じているが実際にはそううまくコントロールできない、という意味である。最後に第6因子は、身近に「赤ちゃんをみると」「子だくさんの人がいると」自分ももうひとり育ててみようかと思えるという「身近なモ

デルの存在」因子である。第6因子までの累積寄与率は54.0%である。

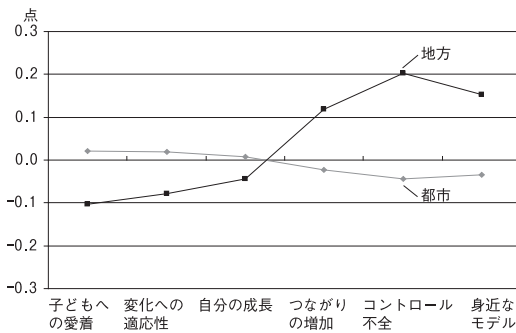
本稿では、以上の6つの因子について因子得点を算出し「子育ての楽しみ」を構成する要素とみなして、考察を行う。

（3）「子育ての楽しみ」要素と地域特性

「子育ての楽しみ」要素と地域特性との関連についての結果は、以下のとおりである。

各要素の平均点の地域による差は、「コントロール願望（不全）感」は「地方」で高く、「都市」で低い（ $t(507)=2.149$, $p<0.05$ ）。

図2 「楽しみ」得点と地域差

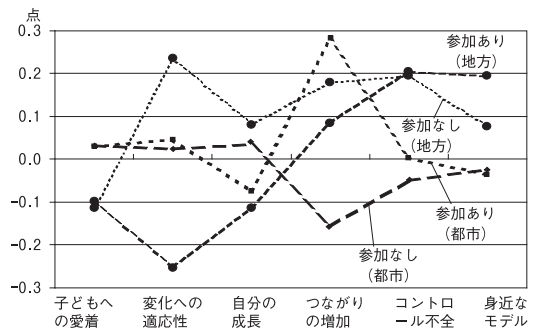


その他の5つの要素については、統計的に有意な地域差はない。しかし、地域別の平均点については、図2に示すように、「地方」部では「コントロール願望（不全）感」だけでなく、「つながりの増加」や「身近なモデルの存在」の平均点も「都市」に比べてかなり高くなっている^{注3)}。この2つは、子どもそのものや養育者本人に関する楽しみではなく、身近な他者に関する楽しみである。「地方」では、三世同居や配偶者の親との近居が多いことも合わせて考えるならば、この「コントロール願望（不全）」は、子どもとの直接的な関係だけでなく、家族や親族等周囲の人々との関係に起因する、複雑で両義的な意識であると考えられるのではないだろうか。

つぎに、子育て支援施策のひとつである「子育てサークル等」について、その効果を「子育ての楽しみの増幅」から検討する。ここでいう「子育てサークル等」とは、子育て中の保護者たちで、ある程度固定したメンバーが定期的に集まって、親子で自由に遊んだり、情報交換をしたり、子育てについての悩みなどを相談しあう活動をしているグループ^{注4)}で、行政主体のものも自主的に活動しているグループも、両方を含んでいる。

子育てサークル等への参加の有無と子育ての楽しみ要因との関連は、「都市」と「地方」とで異なっている（図3）。「都市」では、サークル等に参加している人の「つながりの増加」得点が有意に高い（ $t(408)=4.134, p<0.01$ ）。つまり、「都市」ではサークルに参加すること

図3 「楽しみ」得点とサークル参加（地域区分別）



でつながりが増加することを楽しむと同時に、つながりが増える楽しさを期待して、サークルに参加しているといえる。これに対して「地方」では、サークル等に参加している人の「変化への適応性」得点が有意に高い（ $t(88)=2.603, p<0.05$ ）。つまり「地方」では、サークルに参加することで、変化を肯定的に受けとめられるようになると同時に、変化を肯定的に受けとめ、それに適応する人がサークル活動に参加しているといえる。

以上のことから、子育てサークル等への参加を「子育ての楽しみ」の増幅のための施策と位置づけたとき、地域差によるサークルの果たす役割には、「都市」地域では「つながりの増加」、「地方」地域では「変化への適応性」の増幅という違いがあることがわかる。

IV 考 察

(1) 「子育ての楽しみ」要素の検討

「子育ての楽しみ」には、子ども自体が愛らしいという育てる対象に対する愛着だけでなく、自分自身に関するものが複数あることが示された。なかでも養育者自身に関する要素として、先行研究で指摘されていた自分自身の成長に関する楽しみだけでなく、生活や心身状態が変化することへの期待感が含まれることが明らかになった。さらに、つながりの増加が楽しいという、子どもを通じた関係の広がりも楽しみとして認識されている。とくに、実際に子育てをしている人と交流することで子育ての楽しさが再

確認されることが、「身近なモデルの存在」要素から示唆された。また、コントロールしたいがなかなかできないという願望（不全）感についての因子が抽出されたことから、「負担ばかり」あるいは「楽しい一方」ではなく、「つらくもあれば楽しくもある」子育ての実態が指摘できる。

「子どもへの愛着」「自分の成長」「つながりの増加」といった既知の要素に加え、妊娠・出産・育児によって、養育者自身の心身や生活が変化することを楽しむ「変化への適応性」と名づけることのできる要素があることが明らかとなった。また、さらに「思いどおりにしたいができない」複雑な意識（「コントロール願望（不全）感」）が抽出されたことから、子育て意識は負担だけでもないが、他方でやはり楽しみだけでもないことが理解される。この「コントロール願望（不全）感」得点は地域により差があることから、子どもに対するものだけでなく、周囲の人々との関係に起因するものだと示唆された。

つまり、「子育ての楽しみ」において、かわいらしさという子どもそのものによる要素は、その一部にすぎない。むしろ「子どもを育てる」行為をとおして作られる他者との関係や、養育者自身の変化が「子育ての楽しみ」を構成する。

（２）「子育ての楽しみ」を増幅する施策の可能性

調査結果から、地域によって、子育ての楽しみのどの要素がより強く感じられているかは異なっており、その違いに対応できる施策が求められているといえる。本稿では、既存の子育て支援策である「子育てサークル等」について、新たな視点から検討を行った。その結果、子育てサークル等に参加することは、孤独な育児を避ける等の、これまで指摘されてきた育児負担軽減策としてだけではなく、楽しみの増幅策としての活用も期待できることが明らかとなった。これまで、「子育てサークル等」に期待されてきた役割は端的に言って、仲間づくりによる育児不安の解消だったといっていよう。同じ

施策を「子育ての楽しみの増幅」で考察したとき、施策の効果は「つながりの増加」得点の伸びとして確認できる（ $t(312)=4.111$, $p<0.01$ ）。サークル活動への参加は、社会的なつながりを増やすことを楽しいと感じる子育て意識と関連があるといえる。

しかし「地方」における「子育ての楽しみ」に注目したとき、「サークルへの参加」と「変化への適応性」とは関連していることが明らかとなる一方で、「コントロール願望（不全）感」得点には影響しないことも読み取れる。

「コントロール願望（不全）感」は、子ども自身や周囲の社会関係に起因する要素であると考えられるところから、サークル参加による新しいつながりや価値観との出会いを最大限に生かせる工夫が必要であると考えられる。

V おわりに

本稿では、養育者の主観的な「子育ての楽しみ」を構成する要素を検討することで、妊娠・出産・育児に対する、これまでの少子化対策のまなざしとは異なる視点を提供した。出生行動は個人的な行動であるが同時に、「社会的伝播行動⁶⁾」でもある。子育てには負担やストレスだけでなく、当然のことながら楽しみもあることを具体的に周知することが、まずは必要ではないだろうか。

そのためには、本研究で探索的に検討した「楽しみ」の構成要素について、さらに項目を精練し、信頼性と妥当性を向上させる必要がある。また、今回は「産む性」に限定して検討を行ったが、当然、養育者として父親についての検討が必要である。「子育ての楽しみ」は、子どもそのものに関連する要素だけでなく、社会関係と関連の深い要素が複数含まれることから、父親の持つ「子育ての楽しみ」も、社会とのつながりのなかで見いだされることが予測される。さらに、子育て（次世代育成）の価値について、今回は主観的な側面についてのみ考察したが、社会全体からみた視点による考察が必要である。今後の課題としたい。

本稿は、(財)ひょうご震災記念21世紀研究機構が2007年度に行った調査研究「ライフスタイルの多様性を支える少子化対策の展開」の成果の一部について、日本社会福祉学会第56回全国大会で行った口頭報告をもとに、新たにまとめたものである。

注1) たとえば、川井尚。育児不安に関する臨床的研究－5－育児困難感のプロフィール評定質問紙の作成。日本こども家庭総合研究所紀要 1998；35：109-143。こども未来財団。子育てに関する意識調査報告書（概要版）。2003。（<http://www.i-kosodate.net/mirai/research/pdf/h15/1-2-4-a.pdf>）。藤田小矢香ほか。核家族と拡大家族の母親の育児ストレスに関する研究。母性衛生 2006；47(3)：176。中村敬。地域における子育て支援－育児不安軽減とこども虐待防止に向けた援助方法の開発に関する研究。2006。（<http://www.aiiku.or.jp/aiiku/rpi/nakamura/works.html>）。野口純子・小川佳代・松村恵子。乳幼児を育てている母親の悩みと育児ストレス。香川県立保健医療大学紀要 2005；2：79-86。などが挙げられる。

2) 女性労働力率の年齢階級別推移グラフの階層クラスタ分析から、49市区町を4つに分類した。詳細は、(財)ひょうご震災記念21世紀研究機構。ライフスタイルの多様性を支える少子化対策の

展開。2008。第3章を参照のこと。

- 3) もちろん、地域によってこの2要素の平均点に差があるとは言えないので、実際には「高いようにみえる」という程度である。
- 4) 「子育てサークル等」の定義については、“香川県ホームページ (<http://www.pref.kagawa.jp/kosodate/shoshi/circle/index.htm>)”を参考にして筆者が作成した。

文 献

- 1) “内閣府ホームページ (<http://www8.cao.go.jp/shoushi/taikou/t-mokuji.html>)”
- 2) 田中和子。育児適応に影響を与える要因の検討。母性衛生 2007；47(4)：554-62。
- 3) “内閣府ホームページ (<http://www8.cao.go.jp/shoushi/taisaku.pdf>)”
- 4) こども未来財団。子育てに関する意識調査報告書（概要版）。2003。（<http://www.i-kosodate.net/mirai/research/pdf/h15/1-2-4-a.pdf>）
- 5) 古橋紗人子。子育て施設を利用している親の「子育ての喜び・楽しさ」に関する意識調査からの考察。滋賀女子短期大学研究紀要 2006；31：49-60。
- 6) 山口一男。少子化の決定要因と対策について。経済産業研究所ディスカッションペーパー。2004；(04-J-045)“経済産業研究所ホームページ (<http://www.rieti.go.jp/jp/publications/dp/04j045.pdf>)”